

大賞

さいとう みつえ
齊藤 美津江

亡夫へ声の恋文 齊藤 美津江

私は「千の風になって」の歌が好きです。
なぜなら、団体の長として活躍した亡夫(つま)は、
きっと千の風になって、大空を吹き渡っていると想うと和やかな
気分になるからです。

過ぎし仲秋の穏やかな日、庭のベンチに腰かけて
大空のまほろを仰いでいると、温かい座布団のような白雲が
千の風に吹かれて我が家の方へ流れてくる
「ああ。」

あの白雲にきっと亡夫(つま)がいるに違いないと想うと、
急に恋しくなって私は声をかけた。

「ネェ、二人で、お茶を飲みましょうよ。」

と呼びかけると

「オオ、すぐ行くよ」

と声が聞こえたのは幻で、すぐ山彦が返って来た。

何とも空しくなった私は、

見上げる視界を過ぎりゆく白雲に、又声をかけた。

「いつかきっと我が家の空に来て下さいね。待っています。」

と視界から消えるまで、じっと見送った。

その日の夜半に夢の中で、再会を果すことが出来たが、

それが夢であっても、とても嬉しかった。

亡夫と、永訣した日より早や十三年になる。

先日住職を招き親族(うから)らと共に十三回忌の法要を静かに
修した。

千の風に流れる白雲の声の無き世界にいる亡夫は、これからも
私の心の中で、生き続けて行きます。

かつて白雲に呼びかけたことを、私は決して忘れない。

だって、それは亡夫(つま)への声の恋文だから。

了

(千葉県／88歳)

社会福祉法人愛の友協会